

## 論文の内容の要旨

論文題目 ケニア農村世帯の生計戦略：「脱農業化」論に関する一考察

氏名 伊藤 紀子

本論文の目的は、ケニアの後発農村地域で 2010 年に行った家計調査データを主として用いながら、調査地に住む世帯の生計戦略の実態と、その社会的背景を包括的にあきらかにすることである。第 1 章では、アフリカ農村開発をめぐる先行研究をまとめ、研究方法を提示した。近年、アフリカ農村の貧困問題の諸相を、世帯の営む生計の実態検討を通じてあきらかにしようとする「生計アプローチ」の分析枠組みに依拠した研究の蓄積が進んでいる。各地で行われた生計研究は、農村世帯が世帯内の労働を多様な経済活動に分散させる「生計多様化」が、リスクを緩和し、生計の安定性や生活水準の上昇を達成するうえで重要な戦略であることを指摘している。こうした研究を踏まえ、ブライスソンは、生計の長期的変容を、出稼ぎによる人口流出、非農業活動就業の拡大、小農が大規模な商業的農家と土地なし農業労働者に分かれる農業労働形態の変化、非生産人口の社会経済的疎外といった、住民の生計が小農的な生産様式を離れる「脱農業化」という視角で捉えることを提示した。農産物市場の発達していない辺境農村では、出稼ぎにより労働が不足し、農業への投資が行われず農地の売却や耕作放棄が起き、非農業に従事できない高齢者の困窮や飢餓が深刻化していることが報告されている。ただし、生計アプローチの視角からは、世帯間の相互作用を通じて形成される社会関係の全体像と個別世帯の生計の関連といった、生計の社会的背景を把握することが困難である。そこで本論文では、世帯の資産アクセスを媒介し、成果の分配にもかかわる、住民の社会ネットワークの構造と機能を検討し、農村経済の地域的個性に対する理解を深め、近年の開発研究における画一的な分析枠組みと、脱農業化の方向性を強調する貧困削減政策に対し、新たな見解をもたらすことを狙う。

第 2 章では、調査地の生計の背景をまとめた。ケニアの開発政策を概略し、多様な地域での生計研究の成果を整理した。貧困地域の生計の実態をミクロレベルで把握するための家計調査を実施する地域として、ビクトリア湖・ウガンダ国境沿いにあり都市へのアクセスが悪い西部州ブニャラ県にある隣接 3 村を設定した。この地域に住むルイヤ族の慣習では、父系の出自集団であるクラン単位で土地を占有し、クランの土地に家を建て、農業や放牧を行うという生活が営まれてきた。今日では居住単位の核家族化が進んでいるが、クランへの所属意識は強く、近隣に住む親族は「コンパウンド」という集団を築き、日常的に相互扶助を行っていることを述べた。

第 3 章から第 5 章にかけては、世帯単位の生計戦略分析を行った。まず調査村に住む 223 世帯の所得源内訳データを用い、主要な生計戦略パターンを検討した。その結果、主要な生計戦略は、(1) ビクトリア湖での漁業、(2) 行商や日雇労働など非正規非農業、(3) 自給農業を中心とする所得源多様化、(4) 教師や公務員など正規非農業、(5) 他世帯からの贈与への依存に分けられた。調査地では、(3) の自給農業を中心として多様な所得源を持つ世帯や、(2) や (4) の非農業からほとんどの所得を得る世帯が多かった。高齢で資産の少ない世帯の一部は (5) の他世帯からの贈与に生活を頼っていた。

第 4 章では、調査地で行われている農業の経営実態をあきらかにした。農家は、親族からの分割移譲や非親族からの借入などによって農地を取得していた。農地は一部の世帯に集中せず、世帯の多様な主体への働きかけや、富の分配や独占のための戦略的な行動を通じ、多くの世帯に細分化され取得されており、土地なし農業労働者もほとんどいなかった。農家の大半は、小規模な農地で低生産型農業を営んでいるが、生産が自給レベルを大幅に下回るため、市場から食糧を購入する必要に迫られていた。

続いて、農業のリスクが大きい中でどのような出稼ぎや非農業活動が行われているのかを第 5 章で検討した。出稼ぎ労働者は少なく、出稼ぎ先からの送金も小額であった。近年では、出稼ぎ労働は縮小傾向にあり、帰村し農業を始める人も増加している。一方、在村の非農業活動就業はかなり進展していた。ただし、安定的雇用・現金所得の得られる教師や公務員などの正規非農業に従事できる世帯は少なく、ほとんどが魚の転売や日雇い労働などの非正規非農業に従事する。収入が低く不安定であるため、1 人が複数の職業を兼業したり、複数の構成員が非農業活動を行うなど、世帯内で明確な分業が行われていなかった。

このように、調査地でも先行研究の指摘と同様に、農業の収益性が低く、非農業活動が生計において重要になっていた。ただし、多くの世帯が農業を離れつつあるというわけでもなく、新たに農地を取得する動きが活発化していた。農業の生産性・収益性が低く、安定的な非農業雇用機会も不十分な状況で、小規模な農地を取得することは世帯の生計にとってどのような意義があるのか、自給農業を中心に所得源を多様化している世帯の生計がどのように維持されているのか、他の世帯からの贈与に依存した生計がどのように成り立つのか、という点については、「脱農業化」の視角や世帯内分業の観点から十分に説明することは困難であった。

そこで、第 6 章からは、調査村にはりめぐらされている社会ネットワークに注目し、世帯の生計の成立過程を再考した。その結果、農地や非農業への就業に対するアクセスや、世帯間の協業や成果の分配をもたらす要素として、社会関係が生計に果たす役割が重要であることが示された。第 6 章では、父系親族集団の分布と機能を検討するため、調査世帯を、近くに父系親族を持ち集団に属する所属世帯と、同じ村に親族を持たない単独世帯に分類した。村で多数派を占めるクランが形成する大規模な集団内では、農地の移譲や労働交換、非農業への職業紹介、現金や現物の贈与が盛んで、各世帯に帰属する多様な資産・成果が、集団内で再分配されていた。所属世帯の多くは近隣に農地を取得し、第 3 章で分類した (3) の農業を中心とした生計多様化戦略をとる。親族からの紹介を受けて (4) の正規非農業活動に従事する世帯は、農家や高齢の親族に現金の贈与を行い、(3) や (5) の生計をとる世帯を支えている。このような相互関係を通じ、集団レベルで生計が多様化され、農家や高齢者も不足する資産や成果にアクセスし、生計を安定化させることが可能な地位を獲得していた。ルイヤ族の慣習にもとづき、父系親族の間では農地を平等に分配する圧力がはたらくが、余所者にも無償で農地が分け与えられるということはほとんどない。そのため単独世帯は農地の取得が困難で、姻族や知り合いから農地を借りていることもあるが、利用の権利は不安定である。多くの単独世帯は (1) 漁業や (2) 非正規非農業を生計の中心とし、他世帯との間で行う贈与も少ないため、所属世帯に比べ、生計の多様性・安定性を確保しにくい地位にあった。ただし、親族ネットワークの発達度や機能は、村によって異なっていた。有力な親族集団が存在せず、多くの単独世帯によって構成される流動性の高い村では、親族集団内の分業や余所者への排除に起因する、資産アクセスにおける所属世帯の優位性や、所属世帯と単独世帯間の生計の差異が、他村ほどあきらかでなかった。

第 7 章では、多様な社会的紐帯の生計における役割分業について考察し、村ごとの社会ネットワークの構造を、生計の特色と関連させてあきらかにした。緊密な親族ネットワークが存在する村では、親族集団内の相互扶助が盛んであるが、親族集団間の分断や、余所者への排除も起きているとみられた。一方、余所者が多く親族ネットワークが希薄な村では、各世帯が独立して生計を立てる傾向にあり、金融講のネットワークを通じ非親族間の社会的紐帯が形成され、資産形成にも活用されていた。このような中で、夫と離婚した女性世帯主世帯は、重層的なネットワークから漏れ、資産や成果へのアクセスが困難で、極度の貧困に陥っていることが多かった。

以上の検討を通じ、調査地の生計の特色と、生計が成立する背景について、次のような結論を得た。調査地は農業の生産性が低く、農産物市場が未発達で、安定的な非農業雇用機会も不足している、貧困者の多く住む地域であった。それでも、出稼ぎによる人口流出や農業からの離脱、農村社会の崩壊が起きているともいえなかった。多くの世帯は農村にとどまり、非農業活動を行いながら農業に従事し続けており、高齢者や農家は他世帯から経済的援助を受け生計を維持できていた。このような生計の背景を理解するうえで、個別

世帯の資産や経済活動だけでなく、世帯間の相互関係により形成される固有の社会構造の内実・役割を検討することが有益であった。個別世帯の資産の乏しさと、世帯内分業による生計安定化の困難さという制約のもとで、社会ネットワークを通じ、世帯レベルだけではなく、集団レベルで生計が多様化されていた。このような世帯間の相互関係の存在は、農家や高齢者の飢餓や極度の貧困を食い止めると同時に、多くの世帯による小規模な農地の保有、非集約的な農業の維持に貢献し、地域の食糧安全保障の面で一定の役割を担い続けていると考えられる。

本論文の事例から、貧困削減政策への含意として、次のような諸点が導かれる。すなわち、開発介入を行っても現地の社会ネットワークの諸相やその機能によって効果が異なること、住民の私的なネットワークから漏れた世帯を特定し貧困ターゲティングに生かす必要があること、高齢者の生活を守り、農村社会のまとまりを維持し農村経済の長期的安定性を実現するうえで、農業の持続性を確保することは重要であり続けていると考えられる、ということである。